



AET2

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II

Tuesday 29 May 2018, 9.00 to 12.00

Paper J14

Premodern texts

Answer **all** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet and on the **second copy** of the question paper provided. **Tie** the second copy of the question paper **in** your answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

Shinjigen dictionary

Kojien dictionary

Second copy of the question paper

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

Translate the following two **unseen** texts.

Question 1

Add the *kundoku* to the following **unseen** passage, and translate it into English. Please, do the *kundoku* markings **on the second copy of the answer paper**. You do **not** need to do the *yomikudashi*. [25 marks]

處分
私領畠地事
合壹段者自東三段目
在左京八条三坊六坪
四至
限東小路 限西類地
限南際目 限北路
右件畠元者比丘尼願阿弥陀佛相
傳之私領也更無他妨而一子在原
姉子處分既畢但於本公驗者依
有類地不能副渡故面毀畢仍為
後代證文放新券文之狀如件
建長貳年五月 日
(花押)

建長 8 年 (1250) 5 月日尼願阿弥陀仏畠地處分狀, 古文書 kept at the Harvard Law School.

Question 2

Translate the following **unseen** passage into English. [25 marks]

二 八条院庁下文

(久我家文書)

八条院⁽¹⁾庁下 尾張国真清田社⁽²⁾

可_下以_ニ女房大納言局_一為_中預所_上事

右以_レ人為_ニ預所_一、可_レ令_レ執_ニ行社務_一之状、所_レ仰如_レ件。神官宜承知、不_レ可_ニ違背_一。故下。

寿永二年九月廿五日主典代散位大江朝臣(花押)

別当大宰大貳藤原朝臣(花押)

(1) 鳥羽天皇皇女璋子内親王 (2) マスミタ社

八条院庁下文, 古文書 from the archives of the Koga family

(TURN OVER)

SECTION B

Question 3

Translate the **unseen** passage from the picture-book. (An **enlarged version** of this text is provided at the end of this exam paper.) Then comment on the intertextual strategies used in adapting the main source text *Shin Chikusai* (vol. 1, 1) as well as on the interplay of text and illustrations. The text from *Shin Chikusai* is for your reference only. [50 marks; out of which are **30 marks for translation**, **20 marks for commentary**]

(1) 花と言ふは都の東方陰、
(2) 藪に生るる鶯の、
竹斎と言ひし、
昔の藪医者あり。
その子、筍斎とて、療治の名誉なること、
尻から一番、極めて貧しけれど、
酒を楽しみける。僕一人あり。
(3) 去じにらみの介が子なればとて、
睨眼介と言ふ。入れ残し
目薬屋がまねをして、夏蛤の
一升三文づつの時、毎日一斗買ふて
近所へ遣はし、身を煮てまいり、
からはこの方へ、
と言ひけるほどに、
「さてこの目薬は、
大分売れける」と沙汰せり。

(客)「二升で五文に
まければよいに。」





世の中に医者ほど嫌な家業はなし。
 例へば、宵に薬出し置、朝、脈に
 見舞へば、(患者)「昨日の
 お薬、腹にもやつきがきました。
 足が冷へまするの」と言ふ。
 また、そこへ見舞へば、「いよく下りも
 止みませず、大熱がさしまして、
 仏様の所へ飯食ひに行こう、と
 うは言を申」と、母親なみなみだぐみて
 言ふ声、聴身にこたへける。医者は
 上手さへ、病家より
 呼びに
 来ねば行かれぬ商売。
 と言ふて、内にはかりも居られず。
 ねめ介連れて、京中を毎日く巡りける。

や 屋
 御すい物
 御とり肴

(4)ひがし (5)やま (6)とうみ
 東山、八坂の塔を見上げて、
 (筍斎)「まことや、昔、
 この塔婆、帝都の方へ
 ゆがみしを、しやゝの浄蔵貴所と
 言ふ大徳の祈りにて、ゆがみを直
 せしとぞ。」筍斎、
 我が身代の不景気につけて、
 一首の狂歌に、
 その人に祈り直してもらいたし
 我が身上の倒れかかるを
 (筍斎)「この風を頼ん、金持の倉から、
 良いことを吹きつけてもらいたいものだ。」

Chikusai Junsai / Nidai no homare isha (published by Urokogataya), in
 Edo no ehon 1, pp. 159-60.

(TURN OVER)

The following passage from *Shin Chikusai* is for reference only.
Shin Chikusai 1/3

新竹斎卷之一

① 囀は軽口の鳥部野

花といふは都の東。西の京の片陰蔽に生るゝ鶯の竹斎が世継に筍斎といふ医師あり。療治の名誉なる事。日本第一。跡からかぞへて大母指を過ぎ。さればきはめて貧けれど。酒にたのしみてうきを忘る。人間のたねならぬにはあらで蜷といふるめうあり。天性頭大に尻ほそく。爾も親の口をまねて。歌の道のよことび。怪我にもこしおれならぬなし。家人ひとり有。去じ白眼の介が子なれば。睚眦介と呼。若党にも小者にも女房にも下女にもたゞ一人なれば。世人又こと名をとなへて。二枚屏風といふ。勝手次第(一オ)用に立るといふ事とぞ。此ものも家風を仰で。歌物がたりかなん書に眼をさらし。其道に枕をくだくはゆふにやさしきわざなりかし。春のながめのつれづれを過し花ゑみ柳みどりして。世にある人々けふはきよ水へ。明日は仁和寺へと。思ふどち打まれて。心々行に。うかされ筍斎もねめ介をぐして。いつちと定たるかたなく。つまさきにあなひさすれば。たれかいひし春の色あるひんがしにあゆみ。祇園の御社にまうず。げにも桜の八重一重ちりもせず咲ものこらぬ。日ざかりの朱の玉

垣神さびて。参詣の貴賤さはしを諍。筍斎も人とおなじく。神前に拱て願をつぶやく。南無三社
牛頭天王本地(二ウ)薬師如来。親仁竹斎こそ。一代藪医に朽果侍ふとも。我には親まさりの妙を示し
給へと。ことくどく再拜し立のくさまに。絵馬をみる。かな文字のたほやかに。何氏の女十二才八才と
有少女の業にはいとめづらしく。其外はかぞへつへくも非ず。西の柱に東むきて。ひとりの大の法師。
つらたましひ愧きが。ゆん手に水瓶をさゝげ足もとに土器をふみくだきたるを。たくましき武士のし
とゝいだし付たる筆勢えもいはれず。筍斎打諾これ見けるやねめ介。あの法師と武士と酒のえんをな
しけるが。あまり侍が酒を過すを法師笑止がりて飯酒戒の罪などいひ立。鉾子をとらんといふを。侍
こらへず引とむるとて。盃をふみわりし所よと。子細らし(二オ)(二ウ・三才挿絵)くかたるをねめ介
さゝやきてむさとしたる事な仰そ。あの武士は平の忠盛こなたは当社の承仕法師。昔白河の院の御し
のひの御幸ありし時。かうくの事ありて抱とめたる図画とこそ申候へ。よそにも人の聞物をといへば。
筍斎ぬからぬがほで。まことにいかにもこなたは忠もり。されば上なき酒のみにてありしと。あるふみ
に

今一盃たゞもりたらぬさかへいじくだけで物を思ふかはらけ

と口かしくいひて立のけば。ねめ介も腹かゝへ行。

(中略)

(TURN OVER)

れど
(中略)
かたふくよはひの今此所にかゝる所作しけるとぞ。げにや紅は蘭生にうへてもよきいろのうつりかは
らぬに。替りはつるまゆの霜こそにくけれ。こゝを出て八坂の塔を見あげ。まことや昔此塔婆帝都のか
たにゆがみしを。浄蔵貴所といふ大とこの祈てゆがみをなをせしとぞさいつ比富尾何がし此所にて俳
句あり
浄蔵ありや昼にかたふく八坂の花
筍斎はまた
其人に祈なをしてもらひたし我身上のたふれかゝるを

Shin Chikusai, in Nishimura-bon shōsetsu zenshū, vol.2, pp. 206-210.

END OF PAPER

Two pages follow with enlarged text for question 3

Enlarged text for question 3

(1) 花^{はな}と言^いふは都^{みやこ}の東方^{ひがし}陰^{かげ}、
(2) 藪^{やぶ}に生^うま^るる驚^{おどろ}の、 (客) 「一升で五文に
竹^{たけ}斎^{さい}と言^いひし、 まければよいに。」
昔^{むかし}の藪^{やぶ}医^い者^{しや}あり。
その子^こ、筍^{ひゆん}斎^{さい}とて、療^{りやう}治^ちの名^め譽^{いよ}なること、
尻^{しり}から一^{いっ}番^{ばん}、極^{きよく}めて貧^みしけれど、
酒^{さけ}を楽^{たの}しみける。僕^{ぼく}一^{いっ}人^{にん}あり。
(3) 去^いじにらみの介^{けい}が子^こなればとて、
睨^{ねめ}眼^{がん}介^{けい}と言^いふ。(4) 入^いれ残^{のこ}し
目^め薬^{ぐすり}屋^やがまねをして、夏^{なつ}蛤^{おまぐり}の
一^{いっ}升^{しやう}三^{さん}文^{ぶん}づつの時^{とき}、毎^{まい}日^{にち}一^{いっ}斗^と買^かふて
近^{きん}所^{じよ}へ遣^つはし、身^みを煮^にてまいり、
か^からはこ^{この}方^{ほう}へ、
と^と言^いひけるほどに、
「さてこ^{この}目^め薬^{ぐすり}は、
大^{だい}分^{ぶん}売^うれける」と沙^さ汰^たせり。

continued on page 10.

(TURN OVER)

世の中に医者ほど嫌な家業はなし。

例へば、⁽¹⁾宵に薬出し置、朝、脈に

見舞へば、(患者)「昨日の

お薬⁽²⁾ 腹にもやつきが きました。

足が冷くまするの」と言ふ。

また、そこへ見舞へば、「いよく下りも

止みませず、大熱がさしまして、

仏様の所へ飯食ひに行こう、と

うは言を申」と、母親⁽³⁾なみだなみだぐみて

言ふ声、聴身にこたくける。医者は

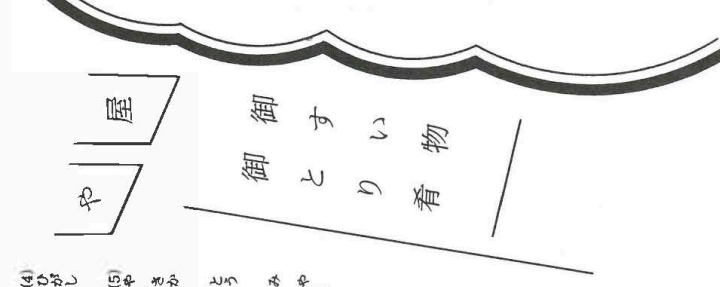
上手 さへ、病家より

呼びに

来ねば行かれぬ商売。

と言ふて、内にはかりも居られず。

ねめ介連れて、京中を毎日く巡りける。



⁽⁴⁾東山、⁽⁵⁾八坂の塔を見上げて、

(筭齋)「まことや、昔⁽⁶⁾

この塔婆、帝都の方へ

ゆがみしを、しやゝの浄藏⁽⁶⁾貴所と

言ふ大徳の祈りにて、ゆがみを直

せしとぞ。」筭齋、

我が身代の不景気につけて、

一首の狂歌に、

その人に祈り直してもらいたし

我が身上の倒れかかろを

(筭齋)「この風を頼ん、金持の倉から、

良いことを吹^{*}きつけてもらいたいものだ。」